

いのち
この生命縮めても

渡辺和子・義臣

この^{いのち}生命縮めても

渡辺和子・義臣

大和書房

この生命縮めても

著者 渡辺和子・義臣

発行者 大和岩雄

発行所 大和書房

東京都文京区関口一―三三

郵便番号 一―二二

電話 (二〇三) 四五二一

振替 東京六一六四二二七

印刷所 奥村印刷

製本所 誠幸堂

乱丁本・落丁本はお取替えいたします

0012-17061-4406

© 1982 Printed in Japan

目次／この生命縮めても

第一章 発病・いつまで生きられるのか

お母ちゃんがいる空 10

膠原病 15

スカーレット・オハラに憧れた少女 23

指が痛い 29

第二章 出逢い・愛

奇妙な見合い 36

義臣さんからの手紙 41

ただひとりの人 51

キスマークを捺したラブレター 59

第三章 生命の証し

この生命縮めても 66

掌が温度を感じない！ 71

第四章 入院生活

もう一人子供がほしい 74

もし私が死んだら 78

子供たちへの想い 85

入院したらもう帰れんようになる 90

入院 96

死の恐怖 99

ちゃあちゃんお家帰ろ 102

神様ありがとうございます 103

残された一日一日をたいせつに生きたい 105

癌にくらべたらまだまし 109

海翁君の叫び 114

心の順備をしておこう 117

第五章 別れの日

もう生きられない 124

せめて子供がもう少し大きくなるまで 126

死の予告 131

一瞬一瞬が貴重な瞬間 134

結婚して幸せでした。でも…… 143

第六章 さよならも言えなかった

意識不明 154

これお母ちゃんとちがう！ 160

お百度参り 167

この生命受け継ぎて 171

エピソード

カバーデザイン・足立秀夫

企画編集・伊藤企画

監修・滝 功一

第一章 発病・いつまで生きられるのか



お母ちゃんのいる空

長男海翁君は七歳になった。

ぜんそくの発作としばしば起こす「引きつけ」のため、母を眠れぬほど心配させた次男秋峰君も五歳になった。

「あんなア、お母ちゃんお空におるんやてえ。ぼくがな、七十歳か八十歳になったらまた会えるって、お父ちゃん言うてたわ」

秋峰君が明るい声で答える。

今の子供たちに、母を亡くした暗さは見えない。

子供たちの母渡辺和子さんは、昭和五十五年二月十九日、三十二歳という若さで生涯を閉じた。海翁君がようやく五歳の誕生日を迎えた一週間後のことである。

朝、子供たちはまず母の仏壇に向かい、小さな手を合わせる。それが何の意味かはまだ知らない。ただ、そうしなければ父、義臣さんから

「ちゃんとお母ちゃんにおはよう言わなあかんやないか」

と強く叱られるのだ。

「お母ちゃんな、淀川から海に出て行って、それから空にのぼってお星さんになってんね

ん。そやから淋しくなったらお星さん見たらええねん」

仏壇の前で、秋峰君がそう教えてくれる。

渡辺さん一家は、大阪を二分するように流れる淀川近くの下町、十三に住じゅうそうんでいる。夏には、この川に七夕の笹を流すのが習慣になっていた。長男海翁君が保育園に入る頃には、病気の進行とともに動くことも辛かった和子さんだったが、夏には無理を押して子供たちとこの川に遊んだ。

父、義臣さんは、和子さんが帰らぬ人となった時、子供たちに母は笹に乗って海に出、星になったんだと教えていたのだ。

子供たちは覚えているだろうか。母と笹流しをした最後の年、「お母ちゃん元気になって」と書いた短冊をいくつも結んだことを。流れていく笹に母が見せた涙を。そして次年、三人だけで笹を流そうとした時、海翁君がどうしても流したくないと、母を思い出して泣いた夜のことを――。

子供たちにとって、この川は母の記憶に強く結びついている。

ふだんは母のない淋しさも見せない子供たちだが、義臣さんに強く叱られた時など、こんなことを言って父を困らせたものだ。

「お父ちゃんなんか嫌いや、ぼくお母ちゃんの方が好きや。ぼくお母ちゃんのとこ行くん

や、淀川で死んだらお母ちゃんのとこ行けるんや。ぼく死んだる！」

かばってくれる母のない淋しさから言うことだとわかっていても、義臣さんはもうそれ以上は叱ることができなくなってしまった。

そんな子供たちが、保育園に入り、小学校に入学した。身体も、以前にくらべれば丈夫になってきた。

和子さんが亡くなった時、義臣さんは二人の子のために、こんな手紙を書いた。二人が大きくなり、母の死が理解できるようになったら見せるつもりである。

子供たちへの手紙

最初に言っておきますが、お母さんは、海翁と秋峰を生んだから、そのために死んだわけではありません。お母さんの病氣は治り難い病氣で、そのために普通の人より長生きができないかもしれないと思っていました。

だから、自分の身体が弱くなってからでは赤ちゃんが生めないのです、元気なうちにほしいと思います、二人が生まれました。

海翁と秋峰を生んで、お母さんは育児や気づかれや病氣やらで、身体も心も本当にしんどかったと思うけれど、君たちが生まれた時に、お母さんの心の中に小さな灯がつい

たようです。

オムツを取り替え、ミルクを飲ませ、言葉を教え、歩きだし、だんだん可愛くなっていく——そんなことが心の糧となって、生きること到最后まで希望を持ち、一時間でも多く君たちと一緒に過ごしたいと願っていました。

お母さんは、自分の病気に甘えて、周囲の人に迷惑をかけてはいけなさと頑張っていました。病気が進んで身体が弱くなってしんどくなると、つい人にやつ当たりしたり、やけくそになるものですが、お母さんはそれを押えていました。本当にえらいと思います。でも時々、淋しそうにしていたり、涙ぐんでいる時がありました。それは海翁が、秋峰が昼寝の時や、夜二人が寝ている時です。

お母さんの楽しみは、二人がどんな大人になるか、兄弟ゲンカはしないか、お嫁さんはどんな人なのか……ああでもない、こうでもないと思像しながらお父さんと二人で話をするのでした。

また、お母さんはおしゃれだったので着る物にわりあいうるさく、それだけに時間をゆっくりかけて君たちの服を選ぶのが楽しみだったようです。

お母さんの一番楽しい時間は、二人を両わきに置いて本を読むこと。どんな本を読んでいたか覚えているかな。「ビー海へ行く」「山姥と小僧」何度も何度も読んでいたね。

お父さんがお母さんの好きだったところは、他人にはやさしくて、自分には厳しかったこと。病気で身体が思うようにならないし、苦しい時がいっぱいあったのに、気持が少しもひねくれなくて、いつも感謝の心を持っていたこと。笑顔を決やさなかったこと。だけど、お母さんは自分では海翁と秋峰に対し、母親として何もできないと自分を責めていたようだから、これはかわいそうだったね。

幸福しあわせという言葉があります。誰もが幸福しあわせになりたいと思っています。

父も母も幸福しあわせになりたいと思い、なれるように努力してきました。ただ、人生はなかなか思うようにいきません。私たちにできるのは、自分の意志で行動し、結果について後悔しないということです。君たちがこれから生きていく上でも、いろいろな分かれ路が来ると思いますが、結果がどうあれ、最初の分岐点に戻ることはできません。たいせつなのは、自分が満足できたか、納得できたか、せいっぱい生きたかということです。お母さんは、短い生涯をせいっぱい納得して生きたと、お父さんは信じたと思います。

君たちがもう少し大きくなって、この手紙を読んだ時、幻のように遠かったお母さんの面影が二人の心に浮かび上がってくることを祈ります。

膠原病
コウゲンビョウ

和子さんの生命を奪ったのは、不治の病と言われる膠原病・全身性強皮症であった。

膠原病は、大きく六種類に分けられる。

『全身性エリテマトーデス』『慢性関節リウマチ』『皮膚筋炎』『結節性動脈周囲炎』『リウマチ熱』そして『全身性強皮症』である。

耳慣れない病名だが、膠原病患者は全国で十八万人近くいると言われ、そのうち、和子さんのような全身性強皮症と呼ばれる患者は、一二〇〇人と言われている（膠原病友の会調べ）。

『全身性強皮症』は最も研究が遅れ、決定的治療法も見えていないという。

生前の和子さんが、何度もうくり返し読んだと思われる一冊の本がある。日本での膠原病研究の権威、順天堂大学の塩川優一教授の『膠原病のはなし』（保健同人社刊）という本である。

少し長くなるが、この耳慣れない病気の恐ろしさを知るために、『全身性強皮症』の項を抜粋してみたい。

全身性強皮症の症状

病気は徐々にはじまります。まず、たいていあちこちの関節や筋肉が痛みます。皮膚症状は手から起こることが多く、手の指のはれ、こわばり、レイノー現象などが初めの時期にもっとも多くみられる症状です。

レイノー現象

レイノー現象についてはすでにお話ししました。手を冷たい水に入れると白く血の気がなくなり、蠟のようになる症状です。女の人は冬季、水仕事をする時に気がつきます。この症状はいろいろな膠原病にしばしばみられるのですが、とくに強皮症ではほとんど一〇〇％にみられる大切な症状です。ですから、このような症状を訴える人は、ぜひ早く診察を受けてください。

皮膚の症状

それから手の指の関節が痛んだりはれたりします。そして指の皮膚は硬くなり、つっぱって、手をにぎることが難しくなってきました。見ると皮膚はつやつやとして光沢があ

り、手でつまみあげることができません。手の血液の循環がわるくなって冷たくなり、それが続いているうちに、指先がちょっとしたげがなどから黒くなってきました。そしてついには指先がくずれ落ちて、次第に指が短くなってくるのです。また手の指は曲がったままになり、ちょうど鷺などの鳥の足のように見えるので、これを「わし手」とよびます。このように手から病気が始まる場合を指端硬化症とよびますが、強皮症のなかには手の先だけで病気が停止し、全身まで拡がらないこともあります。

顔はしわがなくなりつやつやしてきます。そして一見若々しくみえるようになります。ある五〇歳くらいの女の患者さんを治療したところ、すっかりよくなりました。ところが、それとともにつやつやしていた顔はしわだらけになってしまいました。これは皮膚が軟かくなったためです。ところがその患者さんとしては、しわがない方がよいというわけで、私に向かって、もとおりの顔にしてくれというのです。病気をよくして、しかも恨まれたのには本当に困りました。顔の変化がひどくなると鼻がとがり、口が小さくなり、口の周りにしわがよってきます。そして口を大きく開けなくなり、また笑ったりすることが少なく、ちょうどお面のようになります。頭やわきの下の毛も抜けてうすくなります。

同じような皮膚の変化は胸にも背にもみられ、全身どこの皮膚も硬くなり、つまみあ

げることが困難になります。また変化を生じた皮膚は全般的にうす黒くなり（色素沈着）、ところどころに白い斑点が出来たりします（色素脱失）。それからあちこちで小さい血管が拡張しているのがみえます。しかし、これらの皮膚の変化には痛みもかゆみも伴わず、長年の間に徐々に進行してくるので本人も家族も気がつかないことがあります。私のところへ来た二六歳くらいの女性は、診察してみると全身の皮膚が硬くなっているのです。そこであなたは強皮症だといったところ、まったく驚いていました。そこでためしにあなたのご主人はあなたの皮膚のことをおかしいといっていませんかと聞いてみました。が、なんともいっていませんという返事でした。このように本当に本人もご主人にも気づかないくらい徐々に病気が進行することがあるのです。

関節の症状

皮膚の症状のほか、関節にも症状が出ます。全身の関節や筋肉に痛みがあり、関節がはれてくることもあります。また皮膚が硬くなったために関節の動きがわるくなりついに寝たきりになります。これでわかるように慢性関節リウマチの患者さんが寝たきりになるのと、強皮症の寝たきりとははっきりと違います。前者は関節の強直によるものですが、後者は皮膚の硬化によるものなのです。